
毒林檎に口付けを

夢来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

毒林檎に口付けを

【Nコード】

N3184P

【作者名】

夢来

【あらすじ】

あおいりんご。青い林檎？ 葵 林檎。これがあたしの名前。あたしには“よくできた幼馴染み”がいるんだけど、ある日の放課後、そいつが告白されてる現場を目撃して以来、何だか胸の辺りがモヤモヤするんだ…。

高校2年の男女が送る、ある一つの恋愛模様。

毒林檎に口付けを【前編】

あおいりんご。

青いリンゴ？

葵　林檎。

これがあたしの名前。あたしはこの名前をそんなに気に入っていない。“林檎”なんて可愛い音も、苗字との繋がりも、全部ね。

昔から、よく言えばおてんば、悪く言えばガサツだったあたし。そんなあたしに林檎なんて名前は似合わないと思う。

ところで、あたしには俗に言う“幼馴染み”というものが1人いる。そいつはとてもよくできた人間で、おまけに顔もよければ足も長い。

君たちの周りにもいない？　何でもソツなくこなしちゃうヤツ。あたしのよくできた幼馴染みが正にそれなんだ。

勉強もスポーツもそんなに努力しないで人よりできちゃう。神様って不平等だよな…。だからあたしはいつも親にそいつと比べられてた。小学生だったあたしはテストなんかでそいつに負けるのが悔しくて悔しくて、密かに…でもなく、結構剥き出しでそいつにライバル心を抱いていた。

だけど、小学3年の頃。あたしはついに覚った（さとった）んだ。
「自分は勉強じゃあこいつには勝てないな」、と。

元々勉強するより体を動かす方が好きだったあたしには、どうにも勉強のセンスが著しく欠如していたんだ。

それから簡単。勉強もそこそこに、あたしはスポーツの方に専念した。授業でも遊びでも必ず目立って、家庭訪問ではそのことをとても誉められた。

ぶっちゃけお母さんはメチャクチャあたしの将来を心配したんだけど、中学入って3年目、スポーツの推薦で例の幼馴染と同じレベルの同じ高校に行けるって話を聞いたら、勉強のことは言わなくなった。

そんなある日、小学6年生のある日。昼休みのサッカーで男子をコテンパンにしてやったあたしは、とうとうそいつらに言われてしまったのだ。

「葵林檎の毒林檎!!」

…今にして思えばそんなただの負け“子”犬の遠吠えなんだけど、
これがまたあまりにあたしという人間にピッタリなあだ名でさ。

——以来、あたしの呼び名はずっと毒林檎。

高校2年になった今でも、ずっとずっと毒林檎。

「……って、さあ!　こういうワケであたしは毒林檎なんだって」

廊下も教室も賑わって、あちこちで会話の花が咲く昼休み。今日の弁当であるメロンパンを食べ終わったあたしは、同時にたった今まで話していた話も終わらせた。

：いや。どちらかと言うと、話が終わったと同時にメロンパンを食べ終わった…かな？

「へえ…そんな由来だったんだあ」

向かい合わせて並べた机。一緒に弁当を食べていたら突然あだ名の由来を聞いて来た友達が、妙に納得したような台詞を吐いた。

「うん。だからね、あたし的にはその呼び方されたくないワケだ」

「あはは…定着しちゃってるからねえ」

：そうなんだ。あたしのあだ名は高校生になった今も、クラスメイトの中で（下手すりゃ外でも）定着してしまっている。

ただ、別にそれでイジメられているという訳でもない。基本男女共

に仲良くできるあたしは、むしろその呼び名でみんなから親しまれているくらいだ。

「うーん…でもビミョー」

頬杖を着いてボソリと呟けば、友達は曖昧に笑ってお茶を濁した。
あれ？ “お茶を濁す” って言葉…ちょっと使い方よく分かんなくね？

あたしが未知との遭遇を果たした丁度その時、

「おーい、葵ー！」

唐突に名前を呼ばれて振り向けば、他クラスの男子生徒がこちらに近付いて来るところだった。

「はいはい、何でしょう？」

「これ、さっき借りた辞書。サンキュー、毒林檎」

「いえいえ」

彼もまたあたしを毒林檎と呼ぶ…。

その男子生徒は国語辞典を手渡して今一度軽く礼を言うと、さつさと教室から出て行った。：が、あたしのすぐ横にはもう1人別の男子生徒が立っていたのである。

「あれゝ、ヒメ」

そいつに向かって声を掛ける。すると、なぜか周りにいた生徒たちがそれに反応して、あたしに続いてそいつに呼び掛けた。

「やっほー、白雪くん」

「よお、白雪姫ゝ」

「相変わらず色白いね」

しかし、彼はそんな言葉はあっさりとガン無視で、あたしに話を振ってきた。

「それ…昨日俺が貸した辞典だよね？　まさかの又貸し？」

ふふふ…全く的を射た意見だZE。あたしはここ一番のいい顔を作ると、

「その通りさ！」

元気に答えた。目の前で呆れ顔をするこの男こそ、あたしのよくできた幼馴染み、白雪 秘だ。

あつ、白雪“姫”じゃなくて“秘”ね。心の内に熱い思いを秘めた漢おとこになってほしいって意味で付けられたらしいけど…全国の親の皆さん！　苗字と名前の繋がりをよく考えてから、子供に名前を付けましよう！！

ビシッ

「あたっ…」

「じゃあ、返して貰ったからね」

ヒメはあたしの頭にやや強めのチョップを入れると、辞典を持って自分の席に戻って行った。

「白雪くんカッコイ〜！」

「クールだよね！」

「葵、あんな人と仲良いなんてうらやましー！」

直後、女子たちにわっと周りを囲まれて、口々にそんなことを言われた。うーん…そう言われても困るんだけど…。

「だってあいつがカッコイイならあたしもカッコイイだろ？ ほら、顔の特徴似てるし…」

モゴモゴと反論していたら、

「何その対抗心!？」

「確かにどっちもショートで黒髪だけど、アンタのが短いじゃん！」

「そうそう。目も一口につり目って言っても、葵は猫目、白雪くんは切れ長の目でしょ？」

…全否定されました。ああそうですか、あたしは言うほど格好よくないのですか。

そうしてワイワイやっている内に、昼休み終了を知らせるチャイムが響いた。クモの子を散らすように移動を開始する生徒たち。

友達とのおしゃべりに、楽しくはないけど嫌いでもない授業。今日もいつも通りの学校ライフを送り、西日さえ眩しく感じなくなった時間に帰路につくんだろう。

「そう言われちゃってさー。ヒメと似てないって言われただけで、あたしはフォローされないワケ。ヒメはカッコイイって言われんのにだよ？」

帰り道、たまたま途中でヒメと合流したあたしは、彼と家路を共にしていた。文庫本を片手に歩くヒメと、愛用のバスケットボールを

つきながら歩くあたし。太陽は家々の向こう側に沈みかけていて、さほど眩しくはない時間帯だ。

「おーい、聞いてる？ 秘クーン？ あたし今日も毒林檎って言われちったよー」

さつきから“へえ”とか“そう”としか言わない相手に苛立ちを感じ、少々嫌味っぽく話し掛けてみた。

「気にしなければいいと思うよ？」

おお！ ついにヒメが本を鞆にしまいながら、まともな返事を返してくれた。…いや、ちょっとどこかで聞いたことがあるニュアンスだけど。

「いやいや…お前だって白雪姫って言われたら気になるだろ？」

「気になるから気にしない」

「おお…男前」

淡々と答えるヒメ。こいつの悪いところは、こういうクール過ぎるところかもしれない…。

「ヒメはそーゆーところ図太いからいいよな。あたしはほら、繊細だから」

そう言って左肩に掛けた鞆を持ち直した時――

パシンッ

軽快な音と共に、あたしの右手にあったボールが消えていた。

「…って、おい！ 何だよいきなり！ 返せよー！」

そう、ヒメにカットされていたのだ。

「家に着くまでに奪い返せばいいね」

彼はそう言うとき意地悪そうな笑みを浮かべて、ドリブルをしながら駆け出した。

「なっ…ちよっ、待て!!」

慌てて追うあたしと、少しも待とうとしないヒメ。何度もボールを奪おうと手を伸ばすけど、ヒメは仕掛ける攻撃全てを寸での所でヒラリとかわす。

その余裕ありまくりな態度と顔にムツとして、何がなんでも奪ってやろうと決心する。

——言葉には出さないけど、こうやって励ましたり慰めたりしてくれるのは、ヒメの良いところだ。

「はい、お疲れ様」

そうして、ようやくあたしの手の中にボールが返って来た。

…あたしの家の前でな!!

差し出されたそれをバツと奪い返し、あたしはヒメに向かって宣言した。

「来週の球技大会見てろよ!」

「球技大会は男女別でバスケだよ」

「知っとるわ」

冷静に指摘してんじゃねーよ。

余裕たっぷり、イケシャアシャアなヒメが恨めしくなりジロリと睨み付ければ、奴は微笑を湛えて（たたえて）こう言った。

「これは一般論だけど…林檎は格好良いんじゃないくて、可愛い部類に入と思うよ」

途端にあたしの顔面が熱くなる。いきなり何を言い出すんだ、この男は。

「は！？ 何言ってるのし！！ バツカじゃねえの！！」

言い終わった頃にはもうヒメは背中を見せて歩き始めていて…って、おい！ 人の話は最後まで聞け！！

遠くなる背中に文句や罵倒の言葉を浴びせるけど、あいつは一度軽く手を振っただけだった。

…くやしい！！

何だかよく分からないけど、すごく負けた気がする。あたしはあいつの良いところも悪いところも大体知っている。だけど……

「いつもあとちょっとの所でボール奪えねーんだよね…」

呟いた言葉は、ちょっと冷たくなり始めた秋の空気に吸い込まれて消えた。

何気ない日常というのは、ある日突然に崩れるものだ。そう…翌日の放課後、事件は起こった――。

「ありがとうございましたー！」

放課後の体育館に、数十名の女子の声が反響した。あたしが所属している女子バスケット部の活動が終わったのだ。

本日は月に一度の女バス部が体育館を独占できる日。「疲れたね」などと他愛のないお喋りをしながら、部員たちは部室に引き上げて行く。

「じゃ、後頼んだよ」

「はい！」

掃除当番であるあたしと他5名を残し、部員は全員捌けて（はけて）行った。

用具の片付けをしたり、床にモップをかけたり。完全下校時刻を知らせる校内放送が入った頃、ようやく全ての片付けが終了した。

「ふいふ…遅くなっちったい」

沈み掛けた夕日が照らす校内を、あたしは1人歩いていた。ジャンケンで負けて、体育館のカギを職員室に返しに行っていたせいだ。

疲れた足を動かして昇降口に向かっていた時だ。

「悪いけど…ミツサワさんの気持ちには答えられない」

2年1組、あたしのクラスから声が聞こえてきた。誰もいないだろうと思っていたためかなりビックリして、教室前方の扉前を通過しかけていた足が思わずピタリと止まる。

「そっ…か……」

次に聞こえてきたのは、何だかとても残念そうな女子の声。

いけないな、と思いつつも好奇心が勝り、こっそりと教室の中を覗いてしまう。

「!?!?」

そして、そこにいた一組の男女、その顔と組み合わせにまたしても驚いてしまった。

女子の方は3組の光沢^{みつさわ}さん。優しくて大人しめで、男子の憧れ、女子の人気の的である。（つまりおしとやか。いわゆるアイドル。）

そして、男子の方と言えば…

「ごめんね…ありがとう、白雪くん」

散々紹介して来たあたしの“よくできた幼馴染”、白雪 秘だつた。

…えっ？ えっ！？ えっ！

ななな…何であの2人が一緒にいるんだ！？めっちゃ画^えになるじゃん！

…じゃなくて、これってもしかしくなくても告白現場ってヤツ！？
学年のアイドルが、ヒメ…に……？

何でだろ…今、すっごく嫌な気分だ。

喉から胸にかけてがすっごくモヤモヤする。あの2人を見ていたけれど、今すぐこの場から逃げ出したいような…。

ヒメがモテるのは知ってる。だけど今まであいつが誰かに告白されたなんて噂は聞いたことなかったから、その程度なんだろうと思ってた。

なのに…なのに、ヒメが今告白されてる？

心臓がバクバク鳴っていてうるさい。どうしよう…こんなの見たくない。なのに…なのになぜか、ヒメから目が離せない――

「ねえ…これ、聞いたら帰るから…1つだけ教えて？」

突然耳に届いた声に、ビクリと肩が跳ねる。意識がどこかにトリップしていたらしいあたしは、光沢さんの声によって現実世界に引き戻された。

「何？」

いつものように、落ち着き払ったヒメの声。

「どうしてダメか…理由、教えて？ ……じゃないと、やっぱり納

得できないよ」

それを聞いたヒメは少しも考える素振りを見せず、間髪入れずにこう答えた。

「好きな人がいるから」

ガン、と後頭部を殴られたような衝撃があたしを襲った。

何、それ…。あたし…知らない…。

やだ…やだ…すっごくモヤモヤする。

……誰？ それ。

「分かった。ありがとう」

何だかサッパリしたような光沢さんの声。…ヤバッ、出て来る。

慌てて隣の教室に転がり込んで身を隠すと、直後、1組の教室のドアが開く音が聞こえた。

続いて閉まる音が聞こえて、パタパタと廊下を走る音…。

放心状態のあたしは、気が付くとケータイを取り出してメールを打っていた。

その間にまた隣の教室のドアを開け閉めする音が聞こえて、ヒメのものだろう足音が遠ざかって行く。

【宛先】 ヒメ

【件名】 質問

【本文】 今友達から質問されちゃったんだけどさー、ヒメって好きな子とかいるの？ いるんだったら誰？

さほど待たずしてヒメから返信が来た。手の中で振動するそれを慌

てて開き、たった今来たばかりのメールを読む。

【差出】 ヒメ

【件名】 Re..質問

【本文】 いるよ。でも誰かは教えない。特に林檎には。

なん…で…だよ…。

“特に林檎には”

いつものあたしなら即メールを電話に切り替えて、散々文句を言っ
てやったことだろう。

だけど、今のあたしにはその一文がすごく冷たく突き放す文に感じ
られた。

聞かなければよかった…。

すつ、と膝から力が抜ける。あたしはゆっくりとその場に座り込ん
だ…。

毒林檎に口付けを【前編】（後書き）

初めましての方も、またお会いしましたねの方も、こんにちは！
夢が来る来るきつと叶う、夢来むくるです！！

ああ：何て恥ずかしい自己紹介でしょう。ただ、私は今本文についても恥ずかしいのです。

これは2話完結の短期連載恋愛小説なのですが、なにぶん少女マンガ展開のラブストーリーなんて初めて書くもので…。最後までみなさんにお付き合い頂ければ幸いです。

以上後書き、夢来でした☆

毒林檎に口付けを【中編】

ヒメの告白現場を目撃してから一週間。あたしはあいつと一言も口をきいていない。

何を言っているのか分からなかったし、いつも通りにしようとしても、その“いつも通り”がどんなだったか分からないというベタな心境だったのだ。

この一週間というものの、あの日のことばかり思い出してはモヤモヤする毎日を送っている。

：ヒメの好きな人が誰だか分かったら、このモヤモヤもスッキリするのかな？

バンツ！

「あだあつつ!!」

考え事の最中、ふいに顔面に走った激痛。ダンツ、と鈍い音を響かせて足元に落下するバスケットボール。

次いで甲高い笛の音やら、女子たちの悲鳴に近い心配の声やら……

いっけね！ バスケットの試合中だった！

“あの日”から一週間といえば、我が校は秋の球技大会の真ただ中。しかも今あたしは競技に参加中なのだ。おセンチ（死語）になつてゐる場合じゃないぞ、林檎さん！

グラリと揺れた頭をブルブル振って覚醒させると、周りには敵見方問わず人が集まっていた。急激に周囲の音が大きくなる。

「大丈夫！？」

「葵、ケガしてない？」

「ボーっとしてたみたいだけど…今日具合悪いの？」

「ごめんね、葵！ うちのパスがへボいから！！」

…ああ、あたしが悪いというのに、みんな何て優しいんだろうか。大丈夫だよ、鼻血さえ出てないよ！

ごめんよ池ちゃん、試合中にアホなこと考えてた…。違うんだよ、山田さん！ あんたのパスはバスケット界で試合が始まって以来、史上最高のパスだった！

ごめん、大丈夫、ありがとうの3語を繰り返しながら、あたしは審判に試合続行を促した。不安そうな球技大会実行委員の先輩に笑顔を向けると、彼女は心配そうな表情のまま持ち場に戻って行く。

いやー…ダメだね、あたし。何かあったからと言ってもそれはあたしオンリーの問題で、みんなに迷惑を掛けるのは絶対にしちゃいけない。

ふとコートの外に目を向ければ、女子の試合を応援している男子勢の中にヒメを発見してしまった。直後、やつとバチリと目が合ったので、慌てて逸らそうとした…。ら、

ハントツ！

“バンツ”じゃない、“ハンツ”だ。ヒメの野郎、鼻で笑いやがった…！

試合再開のホイッスルが体育館の壁に反響する。

見てろよヒメ…！ お前がたった今鼻で笑った女の底力、とくとお見せしてやる…！

かくして、ここから我がチームは怒涛どとうの追い上げを見せ、外野からは「さっきのアクシデントは何だったんだ！」 「オレたちの期待を返せ！」 というような非難を受けながら、見事なコンビネーションプレーを見せ付けた。

だってあたし悔しい！ あんなに避けてきた男とあっさりアイコンタクト（？）を交わしてしまったことも、そんなヤツに馬鹿にされるように笑われたことも！

それ以前に、あいつ絡みのことで考え事してミスしたことが一番悔しい…！

「こっち！ パス…！」

いつしか胸のモヤモヤはやり場のないムシャクシャに変わり、可愛
そうに：敵チームはその感情の捌け口となった。（まるで他人事）

「邪魔するな！」

味方からパスを貰ってドリブルで疾走。一旦パスして再び疾走：と
思わせてそのままシュート！

「すぐ上がって！！」

どんどん攻めて、ガンガン点差を開かせる。

「くたばれ！」

——そんなあたしの活躍を、ある人物が笑いを堪えて見ているとも

知らずに。

「うわー…。さすが怖えな、毒林檎」

「くたばれとか聞こえるんですけど…」

「オレあいつの母ちゃんがゴリラ以上の何かでもすんなり納得できる」

「何だよ、ゴリラ以上の何かて…。得体知れてねえじゃん」

「…てかさ、さっきからどうしたの？ 白雪姫は。めっちゃ小刻みに震えてて、これはこれで怖いんですけど」

「さあ…？」

「起こってんの？ 泣いてんの？」

「さあ…。笑ってんじゃない？」

「(…っ！ 林檎、最高)」

かくして、あたしたちのチームは勝利に次ぐ勝利を繰り出し、ついに決勝戦まで勝ち残った。

——さて、ここからは男子チームの試合が始まる。決勝戦を目前にして逸る（はやる）気持ちを落ち着かせ、我がクラスの男子陣の活躍を見守ることにしようじゃないか。

ピイイイイイイイイイイイイツ！

2年男子の試合開始を知らせる笛が、高らかに鳴り響いた。

試合が始まって数分。生徒たちの熱気が籠る体育館には、その熱気

に煽られたかのように白熱する選手とギャラリーが溢れていた。

ダンッ

ボールをつく音。

キュッ

バッシュが床を擦る音。

それらが重なり、断続し、コート内で飛び交う声やコート外から弾ける音と交ざり合い、騒音さえも掻き消す爆音となって轟く（とどろく）。…と、表現したらちよつと中2臭いかもしれないが、とにかく男子の試合はめっちゃめっちゃ熱かった！

さっきも言ったが、試合が始まってまだ数分だと言うのに、彼らは険しい（けわしい）表情で汗を散らしながら、コート内を駆け回っているのだ。ぶつかり合う体、低く雄々しく響き渡る、怒号にも近い指示の叫び。

どれもが気迫に溢れていて、女子の試合とはまるで比べ物にならない！！
……って、表現したら、やっぱりまたちょっと中2臭いんだ
ろうな。

……こんな余計なことを考えているうちにも試合はどんどん進み、
より激しい展開を観覧席側に見せていた。

誰かが相手を抜けば、抜かれたヤツはすぐにそいつを追いかけて、
ボールを奪い返したと思ったのも束の間、またすぐに別の誰かにカ
ットされる。

コート外に転がり出たボールが再びコートに戻れば、それを手にし
た男子がゴール目掛けて疾走。

敵チームは必死に食らい付くも、試合同様スタミナの減少が激しく、
中々その背中に追い付けない。ただし、スタミナ切れは相手も同じ
で、ゴールの真ん前、マーク無しという最高の条件の中放った（は
なった）ボールは、無情にもリングに当たって跳ね返る……。

追って、追われて。

奪って、奪い返されて。

ゴールを決めて、決められて。

それでも、双方の点差は徐々に開いていく――

ピ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
ツ
！

「うおわあっ！！」

突然鳴り響いた笛の音に驚き、思わず声を上げたあたし。

「葵、真剣に見すぎ」

「ちょっと怖かったよ」

周りにいた友達に掛けられる声。…って、あれ？

「うそっ！？　もう試合終わってる！」

どうやらあたしは食い入るように観戦に没頭していたらしい。気付いた時には試合が終わっていた。男子チームが互いに挨拶を交わし、次のチームと入れ換わって行く。

「あゝ…いい試合だったわ」

自分は参加してはいなくせに、なぜか達成感で満たされていた。心地よい余韻よゐん浸っていると、男子戦2回目の試合開始を知らせる笛が鳴った。

「葵、次始まったぞー」

「今日ばーっとしてるよ？」

2試合目を遠巻きに眺めながら、友達2人はあたしに話し掛ける。
…あり？　もしかしてあたし、今日具合悪い人みたいに思われてる？

「あゝ…ごめん。だいじょぶだいじょぶ。」

先程のミスが気になっているのだろうか、2人はやや心配げだ。そんな彼女らに苦笑いを返すと、あたしは「ちっとトーナメント表見て来るわ」と言い残して、そそくさとそのばを退場した。

いやゝ…何か、ほんと申し訳ないよね。

「次の試合はゝ…っ」と

結局、行く宛もなく歩き出したあたしが辿り着いた場所というのは、体育館出入口付近に掲示されているトーナメント表前なのだった。

我ながら芸がないなあ、なんて思いながらも、視線はしっかりとその表に釘付けた。

「んーと、次は…2の3B対…げっ！」

思わず古典的な感動詞が溢れた（こぼれた）。

赤いマジックでなぞられた勝ち上がりを表す線。その線は2年3組のBチームと、もう1つの男子チームを繋げていた。そのもう1つのチームというのは：

「…2の1A！」

あたしのクラスの男子チームの期待の星、ヒメがいるチームだった。

首を捻って体育館の隅に目をやれば、次試合に向けてアップを始めている2－1A陣。そこから数メートル離れた地点に、同じくアップを開始し始めている2－3Bチームの面々。

両チームを交互に見やると、あたしは片方のチームに視線を止める。端から端までメンバーをジロリと一瞥し、ふう、と1つ息を吐く。

そして――

「ちょっと体育館裏まで一緒に来てもらえっかな？」

つかつかとそのチームに歩み寄り、ある男子選手の前に立ちほだかった。柔軟体操中、前屈をしていた彼は驚いた顔であたしを見上げた。

ピ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
イ
ッ！

秋の球技大会2年男子の部、第3回戦目の開始を告げるホイッスルの音が高らかに鳴り響………かなかった。

いや、厳密に言えば“片方のコートにしか鳴り響かなかった”だ。その証拠に、2－2C対2－5Aのコートではすでに試合が始まっている。

2－1A男子側のコートにホイッスルが響かなかった理由、それは、こちら側の審判が笛を鳴らさなかったからだ。

じゃあ、なぜ審判は笛を鳴らさなかったのか？ その理由は至極簡単だ。

「あの…君は？」

「はいっ！ 2年3組、加藤 凜太郎です！」

元気に答えた“加藤凜太郎くん”に、審判、ギャラリィ、敵、味方、全ての視線が突き刺さる。

その加藤くんというのは、周りの選手たちより頭1、2個分くらい背が低くて、華奢きやしやな体つきをしていて、女子の体操服着用で……っというかもう女子で、

「何やってるの？ ……林檎」

まあ一言でぶっちゃければあたしだった。……そう、これが審判が笛を鳴らさなかった大きな理由なのであるっ！ ……ってな、ちよつと今ドキドキなんだ。

試合開始直前、あたしは2－3の加藤を呼び出して、恐喝しながらに選手権を譲って貰った。そのうち先生に怒られるんじゃないかと思うと……ドキドキだね！

ふと周りを気にすれば、さっきのヒメの一言と共に、更にドン引きの視線がグッサグッサと突き刺さっていた。しかし、いくらドキドキだと言えど、やはりそんなことは知ったこっちゃない。

あたしは腰に手を当て仁王立ちをすると、右手の人差し指で目の前の男をビシッと指差した。

「2の1、白雪 秘！ あた……オレと勝負しろ！」

ざわっ、と辺りがざわめく。どうやら皆一様に動揺したようだ。

当然だろう。何しろ明らかに加藤クンじゃない女子がいきなりチームに乱入し、相手チームの選手に名指しで決闘を申し込んだんだから。あたしだったら絶対に事態を飲み込めないし、飲み込んだとして納得できない。

我ながら非常識だよね、なんてまるで他人事みたいに考えながら、あたしはほぼ全校生徒の視線を集めたままヒメを見据えた。そして、更に宣言を重ねる。

「あたしが…あっ、いや、オレが勝ったらお前の好きなヤツが誰か教えろ！ その代わり、オレが負けたらそっちの条件を聞いてやる！」

ヒメを含めた選手一同、審判の先輩、先生含むギャラリーの皆さん、全員が水を打ったように静まり返る。隣のコートで展開される試合の音が、やけにデカくなったような気がした。

選手が床を蹴る音やボールをつく音が、振動となって足の裏から伝わって来る。その間にも傍観者たちの顔は徐々に“キョトン顔”か

ら“ポカン顔”に変化していく…が、ヒメだけは違った。いや、確かに先程までの啞然とした顔は変化したのだが…

「ちよっ…何だよ、その哀れみを込めた視線は！」

「あのさ、林檎。凜は？」

「なっ…！ ムシかよ…！ リンリンうるせえ！ あたしが加藤だっつってんだろ！」

「うん…もういいから、そういうの」

ヒメはあたしなんかには決して流されず、どこまでもヒメだった。目が笑っていない生暖かい笑顔を浮かべ、本来審判が言うべき台詞を代弁した。

「登録された選手、又はその補欠の方以外はご退場下さい」

「おい…ほんとに今の聞いてたかよ？ この試合で勝ったら…」

「林檎、凜は？」

「うっ…だから、」

「凜は？」

だんだんヒメの言葉数が少なく、語尾の調子が強くなっていく。そんな彼に早くも怖じ気付き始めたあたしだが、今回ここですぐごとと退散するわけにはいかない。

だって、この無茶振りが受け入れられて、もしあたしが試合に勝ったら、ヒメの好きなヤツが誰だか分かるんだ。そしたら、こんなモヤモヤした気持ちも晴れるかもしれない。

それに…

「ほらあ…先生もスッゴイ睨んでる。このまま帰ったってあたし、生徒指導受けるだけだよ？ 骨折り損もいいところだって」

ちら、と背後を盗み見れば、それはそれは険しい表情の教員の面々。特に生活科のゴリ本といったらもう傑作…げふん、げふん！ もう阿修羅のごとき形相だ。

あたしはヒメを見上げて、「もう一回よく考えてみて下さいよ」なんて言いながらエへと苦笑した。

「……そうだね」

ヒメはしばらく空中に視線を漂わせて何かを考えていたが、やがてポツリとそう呟くと、生暖かい笑顔を嘘つき紳士スマイルに変えて、おろおろとしている審判の人に言った。

「すみません、先輩。この人よく見たら加藤君でした。試合を始めて下さい」

確か何かのマンガでも似たような状況で同じような台詞を言っていたな、なんて思っていたら、ギャラリーが再びざわっと…いや、どよっとざわめいた。

審判はかなりあわてふためいているが、ヒメはお構いなしだ。

「試合を始めて下さい」

優しく親しげながらも有無を言わさぬオーラを発するヒメと、しどろもどろになっていく先輩。そんなかわいそうな彼にここぞとばかりに追い打ちを掛けるあたしの幼馴染みは、語気を強めて同じ台詞を繰り返す。

「試合を、始めて下さい」

審判先輩は見るからに気の弱そうな人だった。草食系男子…って言うのかな？ そんな感じ。

そんな先輩がヒメに反論したりつつかかったりするはずもなく、ついにはポキリと折れてしまった。

「これより、2の1Aチーム対2の3Bチームの試合を開始します
！」

呆然、あるいは愕然としていた選手たちだったが、その声にビクリと反応して“気を付け”の姿勢をとった。そして――

「お願いします!!」

一切の困惑を振り払うかのように、大声を張り上げた。

ピイイイイイイイイイイッ！

試合開始のホイッスルが鳴り響く。未だに着いて来られていないであろう観客陣を完全に置き去りし、あたしたちの試合が始まった。

見てろよヒメ！ 目にもの見せてくれるわ！！

…って、使い方あってるっけ？

毒林檎に口付けを【中編】（後書き）

前後編の読み切りを予定していましたが、やけに長くなってしまったので3話に分けようと思います。もう少しだけお付き合いです。

毒林檎に口付けを【後編】

試合開始のジャンプボール。両チームの背の高い奴が同時にジャンプして、ほぼ同時に1つのボールを叩く（はたく）。

「葵っ！」

「おう！」

叩かれたボールは1度床に落ち、それを拾った味方の男子があたしにパスを出した。あたしはそれを受け取って、すぐさま敵の間に割り込むようにしてドリブルを繰り返す。

「うおっ！」

「マジかよ!?!」

慌てる敵を難なく蹴散らし、ゴール下からレイアップシュート。ボールはフワリとあたしの手を離れて、あっさりとゴールのリングの中に吸い込まれて行った。

ピイツ！

まずは二点。

あたしは“ふふん”と得意気に鼻を鳴らしながらコートを駆け戻る。途中でヒメの前を通ったから、につ、と渾身のドヤ顔を見せてやった。

この調子でどんどん点を稼いでやるぜ！！

——だが、そんなあたしの考えは甘かったようだ。

「葵ーっ！！」

「おうよー！」

掛け声と共に、遠方からボールが大きな弧を描いて飛んで来た。余裕余裕、とばかりに腕を伸ばしたあたしだったが、

バチィッ！！

突然何かに視界を遮られ、手元に来るはずのボールが届いていないことに気が付いた。

意表を突かれたあたしは一瞬何が起きたのか分からなかったが、たちまち視界が広くなり、それと同時に全ての状況を理解した。

「なっ…あっ…ヒメ!？」

振り返れば、あたしの視界の中で見る間に小さくなっていくその背中
中は、あたしへのパスを奪った敵選手、白雪 秘その人だったのだ
！！

ザッ

ヒメは今さっきのあたしのようにレイアップシュートを決めると、
颯爽と踵を返した。完全に呆気に取られてしまっているあたしの目
の前を通り過ぎる際、奴は確かに笑っていた。

とてもイヤミなドヤ顔に、“フツ”という効果音付きの笑いだった。

くっ…くっそおおおお！
ヒメエエエエエエ！…！！

この点は必ず取り返してやる！と意気込んだあたしだったが…

「あれっ!？」

「ちょっ…」

「ウソだろ!？」

——始めのシュート以来、あたしのいるチームは点数を取り返すことは愚か、ボールに触れることさえ出来ない状況に陥ってしまった。

「くそっ…! 何なんだよ!？」

たった今、あたしがカットし損ねたボールがヒメに渡った。ヒメは何人もの選手をヒラリヒラリとかわして、もう幾度目かのシュートを叩き込む。

試合はすでに後半戦に持ち込まれていて、メンバーの士気はだだ下がり。更に、あいつがいるチームとあたしのいるチームの点差は、もう天と地ほど掛け離されてしまっていた。

——何で…何でいつもこうなんだよ!？

そりゃあ確かに、あたしはヒメから1度でもボールを奪えたことなんてなかった。だけど…チーム戦と個人戦は別物だろ!？

…しかし、現に試合は最悪の方向に傾いているのだ。カットはことごとくかわされ、ドリブルをすれば回り込まれて、フェイントを掛けようとしたって奴には全てお見通しだ。

焦りが苛立ちを生み、その苛立ちがまた焦りを生む。そんな負の無限ループの中で、あたしは“あること”に気が付いた。

「葵!！」

「うおっ!」

と、不意打ちで味方から渾身のロングパス。一瞬でも試合中に考え事なんてしていた自分を心の中で叱咤して、あたしはゴール目掛けて突進した。

だが、

バシッ！！

左側から接近して来た男子に気を取られ過ぎ、右から回り込んで来ていたヒメに気付かなかった。

奴は実に手際よくあたしからボールを奪うと、

…ぴたり

その場で、停止した。

——嫌な予感がした。

…止めなければ

彼が、これからしようとしていることを…!!

そう思い、ヒメが持つボールに腕を伸ばした時だった。

トンッ

彼が、その場で跳躍した。

会場中の賑わいが遠く離れていく。伸ばした腕は空を掴み、後ともう、飛んでいくボールを呆然と見詰めるしかなかった。

ヒメの手から放たれたボールは、大きく大きく弧を描き――

ザンツ！

ネットを擦ってリングに吸い込まれた。

スリーポイント・シュートだ。

イ イ イ イ イ イ イ ツ ツ ツ ! ! !
 ピ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ イ
 イ イ イ イ イ イ イ ツ ツ ツ ! ! !

長い、長い、ホイッスルの音が体育館中に鳴り響く。その瞬間、あたしの世界にも音が戻った。

「2年1組Aチーム対、2年3組Bチーム、2年1組Aチームの勝利です！」

ステージの上に立つ放送委員の実況に、周囲のギャラリーがわっと沸き立つ。あたしはすっかり体の力が抜けてしまっていて、チームメートに背を押されるようにして、ようやく整列したくらいだ。

試合後の挨拶を交わせば、一瞬にして辺りに人垣ができ、勝利を納めたチームを誉め称える声や、敗れたチームを労る声が飛び交った。あたしも友達やらクラスメートやらに、「いい試合だったよ!」と背中をバシバシされていたが、それ所ではなかった。

——負けた。

そのことが悔しくない訳じゃないし、試合前にヒメに取り付けたあたしの条件が執行されないことが残念でない訳でもない。

だけど、今のあたしはそんなことを気にしている余裕などない程、言い知れぬ畏怖の念に抱かれていた。…もちろん、ヒメに対する。

掛けられる優しい言葉にも反応できず、ただただヒメを見詰めていると、ふとした拍子に彼と目が合った。そして気付く。

これは試合中すでに気付いていたことだったが、

ヒメの目が、いつもの“お遊び”の目ではなく、“本気”の目だったのだ。

あたしはその目に気圧されるように、じりじりと後退を始め、数歩分下がったところでバツと後ろを振り返り、今持てる最大限の力を振り絞って駆け出した。あつと言う間に体育館を飛び出し、校舎に向かってひた走る。

背後からあたしを呼び止める友達の声が聞こえたような気がしたが、あたしの足を止めることはできなかった。

ほとんどの人が体育館に出払ってしまい、“無人”に近い状態になった校舎内を、ただひたすらに走って走って、だんだんと息が上がってきて、もうそれ以上は走れなくなった頃、それまで機械のように上下していた両足がどうにか止まった。

「はあ…はあ…はあ…、」

肩で荒い息をつきながら呼吸を整え、辺りを見渡す。どうやらここは南棟の3階のようだ。

我が校の南棟3階と言えば、大して需要のある教室もなく、生徒は特に立ち寄ることのないスポットナンバーワンである。今日のようにイベント事がある日は尚更で、ここら一帯は耳鳴りがするほどに静まり返っていた。

その方があたしには都合が良い。まだあまり整っていない息を落ち着けるため、あたしは側の壁に寄り掛かった。

天井の染みをぼうっと眺めながら、あたしはさっきのヒメの目を思い出していた。

いつになく真剣で、何かを心に決めたような目だった。あたしは、あんな目をしたヒメを知らない…。

でも、思ってみればあたしは、結構ヒメのことを知っているように知らなかった。あいつがそこまでバスケのプロフェッショナルだったということも、あんな眼差しをするのだということも、誰かに告白されるようなタマだということも、あいつの…好きな人が誰なのかも、何も知らない……。

それが何故だか妙に寂しくて、悲しくて…。そんな自分に情けなくもなって、気が付けばあたしの両目からは、何か熱いものがこぼれ落ちていた。

「おいおい…。何で泣いちゃうかな」

ぐいっと両目を拭ってみたが、涙は止めどなく溢れてきたので、あたしにはもう、それを止めることはできなかった。

「うつ…うつうつ…」

仕方がないからせめて声を出さないように頑張ってみたけど、どうしても鼻から抜けるような鳴咽が漏れた。

あたしは自分がどうしてこんなに悲しいのかも分からず、もう全部諦めて泣いた。わあわあと大声を上げながら、子供のように泣きじやくった。

何だか、胸のもやもやが大きくなっていくような気がした。

「うう…ひっ…う…」

散々泣きまくって、ようやく涙が止まった。あたしは小さくしゃくり上げながら、ごしごしと目を擦る。

…と、どこか遠くの方からバタバタと慌ただしい足音が聞こえてきて、それがだんだんと近付いて来る。

あたしはビクリと肩を跳ねさせ、さっき自分が駆け上がって来た階段に視線を向けた。段差の下から黒い頭がちらつと見えて、

「林檎っ!!」

あたしのよくできた幼馴染みであり、今最も会いたくない人ナンバーワンが現れた。

「林檎…泣いてるの？」

ここまで走ってきたのだろうか、彼は息を弾ませながら、心配顔で近付いて来た。その様子が少しだけでもやが晴れたような気がしたが、またすぐに靄がかかり、あたしはプイと顔を逸らせる。

「何だよ…何で来るんだよ……」

そのもやもやは嫌な感じにとぐろを巻く。——そして、

「慰めに来たとでも言うのかよ!？ 偽善者振りやがって!! お前なんか光沢さんとイチャイチャしてろよ!」

理不尽な怒りが、爆発した。一息にそうまくし立ててから、あたしはしまったと口をつぐむ。…が、時すでに遅し。

「林檎……見てたの？」

あたしは何も言わなかった。何を言えいいのか分からなくて、何も言えなかった。

ヒメは一度息を吸い、ゆっくりと吐き出す。しかし、それから彼が言葉を発することはなく、あたしたちの間に静寂が訪れ、気まずい空気に包まれた。

：ああ、ヒメは怒っているのだろうか。確かに覗き見なんて趣味が悪い。

そんなことを考えていると、“あの日”の出来事がフラッシュバックしてくるようで、あたしは思わずギュッと目を瞑った。

「林檎」

それと同時に名前を呼ばれ、あたしはすぐに目を開く。弾かれるようにして顔を上げれば、そこにはさっきの目をした“あたしの知らないヒメ”がいて、ぶるりと体が震えた。

——ここから、逃げてしまいたい。

そんなことを考えた矢先、

「林檎、試合前に自分が言った条件、覚えてる？」

真っ直ぐな視線に捕らわれてしまい、あたしはその場から動くことができなくなった。

「林檎が試合に勝ったら俺の好きな人を教える、俺が試合に勝ったら林檎に何か1つ聞いてもらえるってやつ」

確かに、そんな約束をした。だけど、今じゃそれが遠い昔のように思える。

ぼんやりとする頭で何となく質問の内容を理解し、あたしは小さく首を縦に振った。

「じゃあ…俺の願望、“今から俺がする話をしっかり聞いて欲しい”」

ヒメはそう言うのと口を閉じ、じつとあたしの顔を見詰める。

…って、ん？ 願望？ もしかして今の願望！？ 何何！？ あたし聞けばいいの！？

ヒメの意味不明な発言にとりあえず曖昧に頷いて見せると、彼は少し安心したような顔を見せてから、こう言った。

「林檎は頭が悪いから、まず結論を先に言わないと何もわからないよね」

……おい。

「バカにしてんのか？」

“冗談だよ”、なんて肩をすくめた彼だったが、次の瞬間、至極真面目な顔で、とんでもないことを発言した。

「俺は林檎のことが好きだ」

——しん、

周囲から耳鳴りの音さえ消えた瞬間だ。

……って、いや待て！ え？ 何？ あたしの耳どうかしちゃった
！？ 今…今、ヒメがあたしのことが好きだとかぎゃあああああああ
ああああびで g d . a e m @ * # ! ! ?

もうあたしの脳内はパニック状態である。そんなあたしの気持ちを
よそに、奴はさらに追い討ちを掛けてくる。

「昔から林檎のことが好きだった。はしやぎながら俺の後を着いて
来る林檎も、何かにつけて俺のことをライバル視する林檎も、いつ
も前向きで明るくて、そんな林檎が大好きなんだ」

——ボンッ!!

そんな音が聞こえたような気がした。急激に顔が熱くなり、頭がクラクラする。早すぎる展開に全くの置き去りだし、ヒメの言っていることが正しく理解できているのかさえ不安だ。

：だけど、不思議なことに、さっきまでの胸のもやもやは、キレイサッパリ消えていた。

「…林檎は？」

ヒメは至って真面目であるが、あたしは先程から目を見開いて池のコイみたいに口をパクパクさせることしかできていない。

ヒメを好きかどうかと問われれば、自分でもよく分からないが、もしそうだとしたならば、あのもやもやにも説明がつく…。

「いやあ…ああつ、あ…あた、しは…」

何とか気の利いた返事をしようと試みるが、相変わらず口が動かない。何だか今日は、自分の体が言うことを聞いてくれない日なようだ。

しばらくそうやって頭を捻っていると、

「林檎、10回ゲームをしよう」

突然ヒメが突拍子もないことを言い出した。いや待てと顔を上げれば、

「あ…、秘サン……」

そこには、に、と口角を上げて、良からぬ事を企てている時のヒメがいた。あたしがよく知るヒメの顔…。経験上、こんな時のヒメには従おうと逆らおうとロクな目には遭わされない。

「ああ、うん…やる。やります…」

だから、気は乗らないがとりあえず従っておいた。

「じゃあまず、“シンデレラ”って10回言って」

「えーっと、シンデレラシンデレラシンデレラ……」

あたしは訳も分からないまま、“シンデレラ”を連呼しながらその回数を指折り数えた。

「…シンデレラシンデレラ！」

「毒林檎を食べたのは？」

10回言い終わるや否や、ヒメが間髪入れずにそう聞いた。

…わぁお、これよく知ってるうー。ノリで“シンデレラ！”って答えると、“ばーか”って言われるヤツだぁ。

さっきバカ呼ばわりされたからかな、って思いながら、あたしは引っ掛かるはずもなく、こうやって答えたよね。

「白雪姫っ!!」

……言葉遊びって、結構言ってから気付くものだよね。

ヒメがきらびやかな笑顔で笑う。

「そう、“毒林檎”を食べたのは“白雪秘”」

「ひっ…引っ掛かったあああああああ!!」

あたしの痛恨の叫びが廊下にこだました。

「じゃあ、そういうことで」

ヒメがグイとあたしの肩を壁に縫い付ける。

「いやいやいや！　そういうことで！！　どういふことスカヒメ
さああん！？」

ヒメのキレイな顔がどんどん近付いて来る。あたしは必死になって
逃げようと抵抗を試みている…が、強い！　強いよ秘サン！！　女
の子には手加減しよっ…

「うんっ…」

を け 付 口 に 橋 林 毒 、 あ さ

毒林檎に口付けを【後編】（後書き）

長らくお待たせ致しました、“毒林檎に口付けを”の後編です！最初に予定していた前後編編成を前・中・後編編成にした上、後編は中々更新されないという最悪の事態に陥りましたが、読んで下さった皆様、お楽しみ頂けましたでしょうか？

私の初めて書く、少女マンガ展開な林檎と秘のお話はこれにて終了です。これからの参考にしたいので、感想やアドバイスを頂けると嬉しいです。

現在、各話読み切りの短編集、“ある凸凹な二人の話”を連載中です。よろしければ、そちらもご一読下さい。

以上後書き、夢来でした。

焼きそばパンを終え！【番外編】（前書き）

これは本編から数ヶ月経ったある日のお話です。林檎と秘は今……。

焼きそばパンを終え！【番外編】

「やっと四時間目終わったあー！」

某日昼休み。午前の授業が全て終わったあたしは、本日のお昼ごはんを食べようと、机の上にコンビニの袋を置いたところだった。

「どれ食べよっかな」

ウキウキな気分を隠すことなく、袋の中身を机上に明ければ、向かい合わせた席に座る友人たちに呆れた顔をされてしまった。

「葵……相変わらずそれ、量多くないか？」

「食べ過ぎは体によくないよお……」

「いやいや、何言ってるんだよ」

あたしは机に散らばる、計14個のパンを見ながら言う。

「5個昼に食べて、4個放課後に食べる。部活が終わってまた5食べる。超計画的じゃねえか」

“ はは…… ” と苦い笑いを漏らす友達2人。

「 だっ……だってさ! 」

何となく恥ずかしくなったあたしは、別にしなくてもいいのに弁解を始める。

「 パンって意外お腹いっぱいにならないし、バスケット結構キツイから、めっちゃめっちゃ腹減るんだって! 」

2人は聞いてるんだか聞いてないんだか、多分聞いてないけど、“ はいはい ” と適当な相槌を打って、各々の弁当を取り出した。

両手の中にスッポリと収まってしまいう程小さな弁当箱。その中身には、いろんな種類のおかずがごく少量ずつ詰められていて、まさに “ 女の子弁当 ” だ。

「 べっ……別にいんだよ! あたしは焼きそばパン食べたから! 」

クスクスと笑う友達を冗談めかして睨んでから、あたしは机の上の焼きそばパンに手を伸ばした。

——刹那、

……って表現するとカッコイイけど、実際はもっとさりげない感じに、何者かによってその焼きそばパンが取り上げられた。

「何奴っ!？」

即座に反応して顔を上げれば、

「おお、白雪君。今日も葵イジリとは精が出るね」

「こんにちは、白雪姫」

……今2人が言ってくれたように、あたしのよく出来た幼馴染みであり、現・彼氏の白雪 秘が立っていた。奴は実にいやなカンジの笑みを浮かべて、片手に持った焼きそばパン殿下を見せ付けてくる。

「貴様!どこぞの刺客だ!焼きそばパン殿下からそのゲレツな手を離さんか!」

あたしは椅子を蹴って立ち上がると、バカヒメ向かってシャウトした。

「ははっ、返して欲しいなら実力で取り返してみなよ。まあ、俺から一度もボールを奪えたことのない林檎に、そんなことができるのは到底思えないけど」

むむむっ……なんと挑発的な！

「池ちゃん、里ちゃん！悪いけど先食べてて！」

そう言うが早いか、あたしはヒメに向かって突進した。だが、奴はそれをヒラリとかわすと、

「精々頑張rinaよ」

にやりん、と笑って教室を飛び出した。

「なっ……てめ、待てっ！窃盗罪と誘拐罪で告訴するぞ！！」

慌てあたしもそれに続く。

あたし等2人が去った教室で、友人二人が呟いた言葉を、あたしは知らない。

「相変わらずのラブラブっ振りだねえ」

「あはは、バカップル？バカップル？」

「待ちやがれええええええ！」

「俺に追い付くなんて不可能に近いよ。林檎の短い足じゃあね」

「んだとゴルア！！」

——あたしたちは走った。2年の教室前の廊下を猛スピードで走り抜け、音楽室や視聴覚室の前をすっ飛ばす。渡り廊下を駆け抜け、南棟3階をつむじ風となり、幾度となく階段を昇降した。

「てめえヒメこのヤロオオオオオ！」

そして、絶叫と共に図書室前を通過……しようとした時、

「あつ……」

「うわっとお!? 悪い、大丈夫か!? 急いで!」

中から出てきた髪の毛の長い女子にぶつかりそうになり、くるとその場で一回転した。……あつ、前転じゃなくてターンね。

と、
...

「やっぱり林檎は途中でダウンかな？」

どこか遠くからヒメの楽しげな声が響いてきたので、再びあたしは床を力一杯蹴った。

角を曲がれば驚き顔の男女がいて、それは3組の加藤と光沢さんだった。彼らはある一点を見ていたが、あたしが来たのに気が付くと、二人ともほぼ同じタイミングで勢いよくこちらを振り返った。

そして、彼らの視線が向いていた先を見れば……、

「来なよ、林檎」

あたしの焼きそばパン閣下をヒラヒラと見せ付けるヒメが、随分とスタイリッシュに立っていた。

「なら待てっつーの！」

颯爽と走り去り行く奴の後ろ姿を見ながら、あたしは半ばやけを起こしながら追いかけた。

「……観念しろ、白雪。貴様にはもう逃げ道はない」

どこをどう走ったのか覚えていないが、どこかの廊下の突き当たりで、あたしはついにヒメを追い詰めた。

「さあ、人質……いや、パン質をこちらに返してもらおう！」

「……何を言っているのやら。俺がお前を振り切りこの場を脱することなど、造作もないことだと言うのに」

「いい加減目を覚ませ！こんなことをして何になる！？……田舎のお袋さんも、泣いてるぞ」

「……………“何になるか”、だと？」

上がった息を調えながら、変な方向に上がり切ったテンションのままだに、あたしとヒメは茶番を続ける。

「意味なら……ある」

「意味……だと？」

「そう。この状況下に置いて、圧倒的不利な立場に立っているのは俺ではなくお前だ」

「くっ……！」

「そこでだ。……交渉をしよう」

「交渉……？」

昼休み終了を告げるチャイムが鳴る10分前。2年1組の教室には、白雪秘に弁当を「あーん」してあげてる可哀想な葵林檎の姿があった。なかなかたとか……。

「ほんと仲良しなのな、お前ら」

「バカップル？バカップル？」

「そんなんじゃっ……むぐう！」

「そういうこと。林檎、次卵焼き」

焼きそばパンを終え！【番外編】（後書き）

初めましての方もお久し振りですの方もこんにちは、作者の夢来です。毒林檎の番外編いかがでしたでしょうか？

最初は“フルーツ缶詰め”というタイトルの番外編集を作ろうと思っていたのですが、やはりそれはそれ、これはこれと言うことで別々にしました。番外編も二話予定ですしね。

以上後書き、夢来でした。

追イタイ背中【番外編】（前書き）

実は何気に恋のキューピッドだった三組の加藤の話です。何かあったようにやっぱり何もない、高校生男子の気だるい葛藤です。

追イタイ背中【番外編】

加藤凜太郎、高二。背が高いだけで特に取り柄の無いバスケット部。
最近告白する前に失恋した。

……そんなどこにでもいるありがちな男子がオレだ。

片想いの相手は、今オレと並んで歩いている学年のアイドル、光沢十五夜さん。可愛らしい顔立ちに、女の子らしい声。少しウェーブが掛かった地毛は明るい栗色で、まるでハーフのような日本人だ。オレには姉が一人いるんだが、それがかなりの男勝り。だから女の子らしい女の子に憧れ、光沢さんに惚れたというありがちなパターン。

じゃんけん戦争に勝利し、みごと彼女と同じ広報委員に成り上がったのだが、正直あまり口を利けていないというのもお約束なら、光沢さんはオレの友達のことが好きで、しかしそいつは光沢さんを振って幼馴染みの女子と付き合いだしたというのも、何だかどこかで聞いたような話だ。

今、オレは月に一度の学年新聞作りのために図書室に向かっている訳だが、何とも気が重い。光沢さんの告白事件についてはほぼ公になっているので、何かしら励ましてあげたいというのが正直なところなのだが、大して仲のよくないオレがいらんことを言って、余計に彼女を嫌な気分にならせてしまったらどうしよう？

何かに助けを求めるために、ふと廊下の窓の外に目をやると、見覚えのある黒髪ウルフヘアの巨人女がいて、慌てて目を逸らした。……三年生のオレの姉ちゃんだった。視線を戻したら戻したで、今度は前方より聞き覚えのある怒声。ええ、今このタイミングでの登場は控えて頂きたいんですけど……とか思っていたら、向この角から楽しそうに件の友達が躍り出て来た。

やだ、マジKY。光沢さんはその一つのこと見詰めてるし、もうオレ心折れそう。

友達は何かやいやい言ってるし、その彼女はもの凄え形相で走り抜けてくし、頼むから勘弁して……。

教室から図書室までの道のりを、ずっとそんな風にグズグズ考えてたら、目的地はあつと言う間だった。

マズイな、これ。図書室入っちゃったら絶対黙々と作業するだけだよ？

雑談とかする空気じゃないよ？

いいのオレ？

いや、よくないよオレ！

「あの……！」

「光沢さん」、そう言葉を続けようとしたら、髪の毛の長い男女が横を通り抜けたので、オレは思わず口をつぐんでしまう。

「……？ なあに？ 加藤くん」

光沢さんが振り返る。

「あっ……いや……」

変にタイミングを掴み損ねたオレは、不自然にザバザバと目を泳がせるしかできない。

「……………。いつも通り半分ずつやろうか」

気を利かせた光沢さんは、にこりと笑ってそう言ってくれた。

「あ……ああ、うん」

ぎこちなく笑い返して、カクンと頭を縦に振る。くるっと向きを変えて図書室に入って行く光沢さんの後を、オレは慌てて着いて行った。

——ありがち、ありがち。実にありがち。

追イタイ背中【番外編】（後書き）

一つ前の番外編を読んで下さった方は気付いたと思いますが、この話は作中の人物がちよっとしたところで繋がっています。そういうのってよくありますよね。憧れていました、実は。

ちなみに加藤が言っていた“髪の長い男女”については別小説の登場人物ですので、“ある凸凹な二人の話”という小説に投稿します。これにて毒林檎の番外編は終了です。また番外編を書くかもしれないし、書かないかもしれません。少しでも皆様に楽しんで頂けたなら幸いです。ここまでお付き合いありがとうございました。

以上後書き、夢来でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3184p/>

毒林檎に口付けを

2011年5月25日21時23分発行